
全ての『愛』が報われませんように

ゆうじん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全ての『愛』が報われませんように

【Nコード】

N6422B

【作者名】

ゆうじん

【あらすじ】

不幸なことに腐れ縁の2人の女の子と同居している男子高校生。可愛いければ良しかと思いきや現実は甘くないようで……。可笑しな三角関係はどこへ向かうのやら……。

プロローグ―始まりに至るその早朝（前書き）

あれの連載版ですが、設定とか違うんでこれだけ読んでも大丈夫だ
と思います。どうぞお楽しみください。

プロローグ―始まりに至るその早朝

世の中とは実に理不尽である。常に人は不条理な出来事を受けて入れて生きていかなければならない。これは人が人の中にいる上で避けられない事実である。

が、僕はそんなもんは絶対に嫌だ。

故に僕はこの状況をどうにかするつもりはない。不条理なんか飲み込んでしまえ。

何故、僕がこんな哲学もどきなことを考えているかというと、それは時間を少し前に遡ることになる。

時は本日未明。窓の外からは白みだした空が見え、早朝、それも早い時間だろうと思う。

はて？　僕は何故こんな早くに起きてしまったのだろうか。

僕は枕元に目覚まし時計を1つ置いているのだけど、その設定時間はこんなに早くない。

僕は枕元に手を伸ばして、全てを悟った。

「あーなるほどね」

僕の枕元には時計が3つ。その内、2つがけたたましいベルを響かせている。

設定時刻は――4…44

もうなんか……アホかと。何で気づかないんだよ。僕は。

こんなくだらないことをするのはあの2人しかない。ていうかこの時計はあの2人のだしさ。

僕は呆れながら考えた。報復すべきか寝るべきか。

現在僕は非常に眠い。睡眠が絶対的に足りていない。ここは寝るべきか……否！

あの馬鹿2人のことだ。調子に乗るに違いない。ここは1つ格の違いというやつを見せておくべきではないか。

僕よ。剣を持て！

僕は隣の部屋にいる。

この部屋に眠る馬鹿に報復するためだ。

この馬鹿ともう1人の馬鹿、そして僕の3人は1つ屋根の下で暮らす家族もどきである。

この部屋の主は山田華。
以上。

細かい話はまた今度。今重要なのは僕の報復だ。僕はマジックを片手に忍び寄る。マジックっていつでもアレだ。書くやつ。

諸君にもこの時点で今回の任務が理解できたかもしれない。

そう落書きだ。

幼稚と言われようが知ったこっちゃない。これは意外にプライドを傷つけるのだ。

僕は顔を覗き込む形になる。

華はすやすやと気持ちよさそうに寝てる。

クラスの殿方に評判があるわけだ。

少し可愛い。

だが、僕は手を止めはしない。

鬼畜と呼ばれようが。

「南無……」

僕は心を無にして作業を開始する。

はずだったのに。

僕は次の瞬間には床に叩きつけられていた。両腕はガッチリ関節をきめられてしまい動かない。

「な……なぜ？」

僕は自由の利かない首を向ける。そこに不敵に微笑む華。

「甘いわね」

「狸寝入りかよ」

「違う。私は寝ているときでも周囲への警戒は怠らないだけよ」

どこの達人だろうか。僕は思ったが口に出さない。それは終わりが近いからなのかもしれない。

「乙女の部屋に夜這いだなんて……死ぬ覚悟はしてるでしょ？」

どごーん！！！

早朝、謎の怪音が街に木霊する。

住民たちはみな少し早い朝を迎えるのであった。

追記

某日。右目を青く腫らし、左目を黒く縁取られた奇妙なパンダが街のコンビニで目撃される。

周囲の人々は何も聞かずただ彼に

「南無」

と唱えたそうなの。

第1話―最初の話―始まりに至る朝食とその概要

ここらで我が家の説明をしてみるのもいいかもしれない。

そんなインスピレーションが舞い降りた僕は、それに従うことにした。

さてまず僕たちが住むこの家から説明しよう。

この家は元々は僕と僕の兄が住んでいた。築8年の一軒家。でも、その兄は2年前に海外に仕事で渡ってしまった。そこに居候が2人も寄生してしまった。そこから僕たちのこの生活は始まったわけ。2人は居候として暖かな住まいを得た代わりなのか、大抵の家事は賄ってくれる。これは僕としては助かるのだけど――

朝、リビングに入ると何だか煙たかった。視界はうつすら白んでいて、とにかく目と喉が痛い。

「ごほっ……何してんの？」

僕の前でニコニコと笑いながら何かをこねている山田華。16才。僕と同じ高校に通っている。前に言った通り美人だとよく聞く。僕としては少し危ない変な女の子。

「朝の挨拶は？」

「おはよう。華」

「よろしい」

華は満足気に言うと、満面の笑みを見せてくれた。不覚にも可愛いと思ってしまう。そんな僕の苦悩を知ってか知らずか、華は再び作業を開始した。

その作業とは、ボールの中のゲル状のものをひたすらかき混ぜる。ただそれだけ。しかしながら、その手の内では危ない化学変化が現在進行中。

朝からそんなにおかしさ全開でなくても良いじゃないか。

僕は泣きたくなった。

華は相変わらずかき混ぜる。どうやらこの煙の元は華らしい。ボールの中からは遂に彩り豊かな煙があがりだした

あれだ！ スモーク花火だ！

リビングの窓を全開にしながら、そんなことを思った。近所迷惑にならないことを祈りたい。

「本当に何してんの？」

華はキッチンで七色の煙に包まれていた。煙たくないのかな。

「見て分からないの？」

華は不思議そうに首を傾げる。見る人が見れば、可愛いのかも知れない。でも僕には七色の煙に包まれた人をそうは思えない。

「分からないから聞いているんだよ」

全くもって理解できない。もう、なんか花火作ってんじゃないの？
って感じ。

「花火を作ってるのよ」

大当たり。

いや、今回は外れて欲しかったよ。まさか朝起きたらキッチンで
花火を作っているとは。

華は変人だ。解っていたけど改めて思い知らされる。

僕は深い深いため息をついた。

「何でそんなもの作ってんのかは後で聞くとして、それは捨ててこ
い」

華は眉間に皺を寄せるといかにも不機嫌そうにする。

「冗談を本気にしないで欲しいわね。第一、女子高生がキッチンで
花火なんか作るはずないでしょ。馬鹿ね。朝ご飯に決まってんでし
よ」

冗談だったらしい。それにしても、朝ご飯はないだろう。もしか
したら、花火の方が納得できるかもしれない。僕は早朝にして再び
泣きたくなった。

朝ご飯を調理中だというのは理解できた。しかし、それだけじゃ
あ問題は片付かない。僕は意を決して尋ねた。

「じゃあ、その煙をもくもくとたてる怪しい物体は何？」

「玉子焼き」

——はい？

玉子焼き？ これはまたしても冗談なのか？ それともマジで言ってるのか？

いろんな疑問符が頭の中をふわふわと漂っている。
はて？ 玉子焼きはあんなものだったっけ？

否。玉子焼きとは立派な料理だ。花火じゃない。

「それが玉子焼き？ 僕には花火の方がまだ納得できるのだけど」

「そう？ ……食べてみる？」

いらないよっ！

と僕は心の中で叫んでいる。実際には華を無視してテレビを見ようとしているのだけど。

なんかもう相手するのが疲れたから。

「あれっ？」

思わず素っ頓狂な声を出す僕。後ろから聞こえてくる大爆笑。

僕は華に若干のいらつきを感じながらため息をついた。現在我が家のテレビには『節約』と貼り紙がされていた。

こんなことするのは多分、あの人。
僕はテレビを見るのを諦めた。
節約じゃあ仕方無い。

僕は支度をするためにリビングを出た。後ろからは未だに大爆笑が聞こえる。僕は腹いせに華の部屋の扉に『馬鹿在住』の貼り紙をしておいた。

「あっ！ ご飯できたよ」

僕が居間に戻ると食卓には彩り鮮やかな朝食が並んでいた。

「すげー！ なんか普通に美味しそう」

「タニの言い方には少し不満はあるけど……」

「いや、うまいうまい」

僕は華の言葉を待たずに食べる。普通に旨かった。

「うまいよ。でも1つ不満がある」

「私はタニの存在が不満だけど」

僕は華の言葉を見捨てる。まともに受け止めては挫けてしまいそうだから。

「こういう時ヒロインは料理下手ってのが普通じゃないかな」

華は痛ましい目で僕を見る。

「……冗談です」

その目線に耐えられず僕は黙々と食事続けた。

食事を終えてよく考えると我が家のコックは華だということを思い出した。朝っぱらからあんなショッキングな調理風景を見せられたからだろう。気が動転していたみたいだ。次からは華の調理風景を見ることがないように気をつけよう。

僕は『節約』の文字を見つめながら思うのでした。

第1話―最初の話―始まりに至る朝食とその概要（後書き）

次回、2人で出かけます。『あの人』は出せるでしょうか。不安なところですよ。

第2話―つまり、出掛ける（前書き）

感想、お待ちしております。

第2話―つまり、出掛ける

休日の過ごし方としてはただ惰眠を貪り、貴重な時間を贅沢に浪費するのが好ましいと思う。

朝食の後片付けも済ませて一段落ついた頃、僕はソファアーの上で寛いでいた。

今日は水曜日だけど、高校も既に春休みに入ったので行かなくてもいい。特に誰と遊ぶ約束をしたわけでもないから、今日はゆっくりできる。

「おーきーろっ！」

と、思ってたのに……。

華は僕の額に躊躇いなく踵を振り下ろした。間一髪でそれをかわす僕。その後聞こえてくる風を切る音とソファアーの軋む音。

「華さん？　僕に何か恨みでもあるのかな？　朝からこんなじや身が持たないよ」

「別に恨みがあるわけじゃないのよ。ただ気に食わないだけ」

「それはもつと悪いんじゃないでしょうか」

腰も低くければ、目線も低い僕。ソファーから落ちて床に寝そべっている。つまり、華を自然と下から見上げるわけで、アレがスカートの中から見えちゃ……とか考える暇もなく振り下ろされる第二撃。

そこで僕の意識は途絶えた。

「つまり華は買い物に行きたいんだ」

「わかればよろしい」

華はケタケタと笑ってみせた。

「だけど知っての通り、僕は金なんか持ってないよ」

「バイトの給料が入ったでしょ？」

華はニヤニヤと悪役のような笑みを浮かべている。

「何故それを……」

「私に隠し事はできないよ。忘れたの？」

華はいつのまにやら僕の財布を握り締めていた。僕は本日何度目かのため息をついた。

「さあ、行こう！」

華は近所迷惑よろしく、高らかに叫ぶのだった。

第3話―お昼前、残金僅かです。（前書き）

感想お待ちしております

第3話―お昼前、残金僅かです。

僕らが住む街、葉桜町はいわゆるベッドタウンだ。町内のほとんどが居住区で、コンビニがちらほらある程度。つまり、買い物をする際には少し足を伸ばして隣町に行かなければならない。

急な用事がある時は不便だけど、非番な日にはぶらぶら歩くだけで1日過ごしてしまう。

だからというわけではないが、僕と華は今、電車に揺られている。華はお子様よろしく、車窓の景色でテンションが上がっているようで、鼻歌混じりだ。僕はというと、朝の騒動ですっかり疲れてしまっている。何かもう……帰っていいですか？　って気分だけど、華に財布を握られてしまっているので付き合うしかない。

華がはいで手を振る度に悲鳴をあげる僕の財布、3890円。結構気に入ってるから壊さないでほしい。……いや、ほんとに。

「着いたー！」

はい。着きました。隣町。華は駅前で当たり前のことを叫んだ。道行く人が僕らを見る。華は結構、美人なのでただでさえ人目につくのに。

居た堪らなくなった僕は取り敢えず他人のフリをした。

「何やってんの？　タニ？」

そんな僕の努力も台無しになった。

僕は笑顔で言う。

「危ない人には関わらない方がいいかな、と思って」

輝かんばかりの笑顔で華に鳩尾を突かれてから僕らの買い物はスタートした。

最近の僕はだんだん扱いが酷くなっている気がする。僕は本日2枚目の福沢さんに別れを告げながらそう思った。

この馬鹿、金の使い方がおかしいね。まだ、お昼にもなってないのに。

聞いたことねえよ。もやし8000円分も買うやつ。あの時のレジの人の顔が忘れられない。

「はあ……」

「どうしたの？ 自分の存在が嫌になった？ そんならいで死んじゃ駄目だよ。私の方が我慢してるんだから」

華が可愛らしい笑顔で言うもんだから、泣きながら走った。

「人に迷惑かけるなよ。くず！」

「誰がやねん！！」

そんな感じで走ってたら、目の前の人影に結構な勢いでぶつかってしまった。

「いて！」

「……」

尻餅をつきながら相手を見る。怖い人だったらどうしよう……。

「すみません！大丈夫ですか？」

僕は起き上がって手を差し伸べた。

「あ！ タニ！」

「げっ……」

しまった。僕はどうやらとんでもない人にぶつかったらしい。

第3話―お昼前、残金僅かです。（後書き）

あの人がついに！

第4話―緋色

正午を少し過ぎた頃、僕らは近場のファミレスにいた。

僕らとは、午前の段階でこれだけの金と労力を支払った上、午後は更に酷い事になるだろうと憂鬱になっている僕、そんなネガティブ人間と向かい合った席に並んで座る美少女2人。

右に座るはご存知、山田華。メニューを広げてパフェの写真を眺めている。その様はさながら念写をしている超能力者だ。……残念ながら写真には何の変化もないけど。左に座るは華に負けず劣らずの美少女。その名を群青緋色、ぐんじょう・ひいろ僕らのクラスメートだ。彼女はあのユニークな名前に違わず、中々ぶっ飛んだ考えの持ち主だったりする。彼女も華のようにメニューを眺めていた。まあ一般論を言えばファミレスでメニューを見る2人は、財布を見ながら悲観する僕より正しい行動だと思う。

しかしながらこの2人は微妙にズレたことをしている。華は相変わらずパフェを穴が開くほど見つめているし、群青さんはにやにと妖しく微笑みながらページを捲り、時折小さく笑い声を洩らす。その瞳には妖しい光が宿っていた。

2人の異様な雰囲気吞まれないように僕もメニューに目を遣った。腹に残る物にしよう。とかおっさんみたいな理由で品を選んだ。少ししてそれぞれ頼んだものが運ばれてくる。

ウェイトレスのお姉さんに少し癒され、華にナイフで刺され、群青さんにハンバーグセットのハンバーグを取られ、半泣きで昼を終えた。

華は三種類もパフェを堪能しやがった。

お腹一杯。と口を揃える2人を見ると何だかこの代金くらいは払ってもいいかと思った。華はともかく、群青さんの笑顔にはそれ程の価値がある。

ファミレスを出た僕たちはそのまま3人で行動することになった。更に出費が増えるのでは？ と不安になったけど群青さんはあまり買い物をしなかった。

「今日はありがとう」

帰り道。僕らと違って電車で帰る群青さんとは駅でお別れだった。

「こちらこそ楽しかったよ！ また遊ぼうね、群青さん」

華がぎゅっと群青さんに抱き付いた。頭の弱い奴はやたらとスキンシップを取りたがる。端から見れば美少女2人で抱き合っているのだから、視線が集めてしかたない。群青さんは抱きつかれながらも妖しく微笑んでいるから更に危ない。

「群青、ではなく下の名で呼んでくれ。群青はどうも人の名前っぽくないからな」

じゃあ、緋色は人の名前か？ とは訊けなかった。

「うん！ ばいばい緋色ちゃん！」

なかなか離れない馬鹿をひっぺがして帰路に着いた。群……緋色さんは見えなくなるまで妖しく微笑んでいた。

2人っきりで歩く帰り道はただ疲れたとしか言いようがない。華はケラケラと笑いながら僕の隣を歩いていた。

結局1つも荷物を持ってくれなかった。

――追伸――

華が買ったものを家で広げてみた。

もう二度と華とは買い物に行かないと心に決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6422b/>

全ての『愛』が報われませんように

2010年10月10日04時40分発行